
heven ' s formula1 第1章

鎌田悪石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

heaven's formula 第1章

【コード】

N9318G

【作者名】

鎌田悪石

【あらすじ】

1994年、サンマリノGP後の話。天国で第二の人生を歩むことになったセナの運命は。

天国での貴公子

94年5月1日、舞台はイモラ。アイルトン・セナは、後ろからシューマツハの追撃を受けていた。そして7週目、セナのマシンはステアリングにトラブルが発生。異常発生から1・8秒後・・・壁にぶつかった。

しばらくして、セナは目覚めた。そして目に飛び込んできたのは、真っ白な世界と一台のマシン。

赤と白に彩られたそのマシンは、紛れも無く彼が初めて王座を勝ち取ったときの、マクラーレン・ホンダ、MP4/4であった。

程なくセナは、妙な感覚に囚われ始めていた。「ここは果たして何処なんだ？しかも何でこんなところにマクラーレンがあるんだ？」

セナはしばらくマシンを見て

いたが、やがてサイドポンツーンあたりに一枚の紙が置いてあった。その紙には、こう書かれていた。

その車に乗れば、すべてが分かります。

まずは、乗ってみてください。

G・Vより

セナは疑心暗鬼

になりながらも、とりあえず車に乗ってみることにした。すると、奇妙なことが起こり始めた。マシンの色がだんだんかわっていくのだ。マシンの色が黒色になった所で、雨が降り始めた。かなり強い。そしてコースを走っているうちに、今走っている場所がポルトガルのエストリル・サーキットであることに気づいた。そして、チエツ

カーが振られた。セナが混乱しているうちに、次の変化が起こり始めた。マシンの色は黒から黄色に、そしてコースはガードレールに囲まれていた。モナコ・モンテカルロである。セナは気づき始めた。これは自分のF1レースを「プレイバック」しているのだと。。。

そし

て、セナはそれよりずっと「変で」、「ありえない」ものを目撃することになる。

彼はバックマーカーに行き当たった。しかし、そのマシンを抜き去った時、セナは目を疑った。シムテック・フオード、S941。間違いなくこの舞台にはいないはずのマシンだ。そして、そのマシンを駆るドライバーは。。。

4

「ラッツェン！ラッツェンバーガーじゃないか！」 ローランド・ラッツェンバーガー。94年シムテックに乗っていたこのオーストリア人は、

あのサンマリノgpの予選で命を落

としていたのだ。。。

そし

てセナは悟った。自分は既にこの世を去っていたことを。

おそらく彼もこの事態を知らないに違いない。

そこでセナは、彼に
ブレーキテストを仕掛け、マシンを止まらせることにした。

案の定、車の主は凄い勢いですつとんで来た。

「危ないな！何するんだ！」

5

怒っている彼を諭すように、言った。

セナは

「いいか、僕も悪いことをしたと思ってる。だが、少し落ち着いて聞いてくれ。君は・・・もう死んでるんだ」

ラッツェンバーガー

は呆気にとられた様子で、

「え？」と聞き返した。

セナは続ける。「嘘じゃない。というか、俺も死んでるんだ。さっき君を見たときに、気づいた。」

「えっ、

そんなんですか？道理でおかしいことだらけだと思った。何でもうモナコなんだろうとか、ちょっと古い車が多いなあとは」

「テレビをつけてみる、きっと追悼番組がやってると思う。」セナはひとまずホテルに彼を案内した。

「すいません、少しテレビを貸してくれますか？」カウンターの人少しビックリしながらも、テレビを見せた。やはりそこでは、

「アイルトン・セナ、ならびにローランド・ラッツェンバーガー選手追悼番組」が放送されていた。

「てことは、本当に僕たち、死んで

るんですね？」「ラッツエンバーガーが訊ねた。

「そうだ。

」セナが返答した。

「ところで、天国はどちらですか？」「どうせ答えてくれないだろうと思っていたが、カウンターは丁寧に、

「ここから、10キロの

ところにあります」と道案内をしてくれた。

セナはしばし考えたが、結局行くことにした。とりあえず、行かねば始まらない。

セナとラッツエンバーガーはひとまず、10キロ先を目指すことにした。

モン

テカル口を出て、10キロ直進。そこには「天国の入り口」と書かれた門があった。

かくして、天才アイルトン・セナの、文字通り「第二の人生」が始まったのである。

天国での貴公子（後書き）

初めての小説投稿です。「もしも天国にもF1があったなら・・・」
という空想で書き上げたものです。まだまだだとは思いますが、評
価をお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9318g/>

heven ' s formula1 第1章

2010年10月9日11時14分発行